

# 維新史回廊だより

第15号  
平成23年(2011年)  
3月発行  
(年2回発行)

編集 維新史回廊構想推進協議会  
発行 山口県環境生活部文化振興課(山口市滝町一一〇八三一九三三一六二七)

## ◇はじめに◇

幕末の萩藩主毛利敬親公が逝去されて、今年は丁度百四十年の節目の年に当たります。そこで、改めて名君敬親公にスポットを当て、藩主としての思想、施策や実績、或いは先見性などを二回にわたり紹介し、名君たる所以について明らかにしていきます。解説は、毛利博物館の小山良昌館長です。

## ◇幕末の名君 毛利敬親(その一)◇



毛利敬親肖像画  
(山口県立博物館蔵)

### ○敬親公が藩主に就任する前の時代背景はどのようなものでしたか。

十代藩主毛利齊熙(なりひろ)は贅沢好みらしく、隠居後の文政八(一八二五)年、江戸砂

村葛飾邸に移り、十万坪の土地を造成し、広大な鎮海園(ちんかいえん)を建設しました。

また、後に十二代藩主となる世子齊広(せいしゆうとお)は、文政十二(一八二九)年、將軍家斉(ひえなり)の娘和姫(めいじ)を娶り、外様大名の立場上、必要以上に盛大な華燭の典を挙げたのです。将軍家斉は大変な艶福家で、子供の数だけでも五十二名にのぼり、そのため、毛利家では一挙に親戚筋が増加し、膨大な数の祝賀の贈答に頭を痛めたことでしょう。その和姫が、輿(よし)入れされてわずか半年後の天保元(一八三〇)年七月、十八才の若さで逝去されたのです。毛利家では盛大な結婚式に次いで、半年後には盛大な葬式を営み、多大な出費に悩んだことでしよう。

また、天保七(一八三六)年には、前藩主齊熙(なりもと)が五月に逝去され、

葬儀を営み喪に服した後、十二月には世子齊広が十二代藩主を襲封(しゅほう)しました。この齊広は頭

公は、以上のような多難な時代を背景にして襲封されたのです。

### ○敬親公は世上「そうせい公」と呼ばれる向きもありますが、そのように無責任な藩主だったのでしょうか。

公は、文政二(一八一九)年、江戸麻布邸で誕生されました。天保七(一八三六)年、

十二代齊広が二十三才の若さで急逝したのち、翌八(一八三七)年四月、末期養(あさぶ)子とされ、弱冠十八才で十三代藩主を襲封し、名を敬親と改めました。

元来、新藩主の就任は、藩の最大慶事として祝賀していましたが、藩財政が厳しい状況にあるため、公は率先して質素儉約に努められました。藩主の移動に伴う「供(ともだち)備(なまこ)」の人数を削減し、高価な絹服を綿服に改め、食事も二汁三菜を一汁二菜へと改められました。また、藩主の「初御国入り」の際も、前例のない質素な行列で、駕籠をやめて自ら馬にまたがり、菅笠(すげがさ)に木綿の紋付を着用させていたので、出迎えた藩民の多くはその行列を見て涙したと伝えられています。

藩主に就任した公は、藩の財政立て直しを図り、藩財政の実態調査を行つたところ、藩の債務が銀八万貫余に上ることを知りました。村田清風が云うところの「銀八万貫の大敵」で、この銀高を米石高に直すと米百七十万石に相当し、三十六万石余の毛利藩にとつては大変な額の負債だったのです。

一方、防長両国内は天保元(一八三〇)年以降、毎年のように風雨洪水、干ばつ、蝗害(こうがい)等による凶作に見舞われました。特に天保七(一八三六)年申(さる)年の夏には大雨が襲い、後世「申歳の大水」と称されたように、両国内の被害高は実に二十七万石にのぼり、農村の疲弊はその極に達し、多数の餓え人が生まれました。また、天保二(一八三二)年には全藩的規模で農民一揆が起きています。

※蝗害…ウンカ等のために農作物が受ける災害

脳は明晰で、藩の将来を託するに足る藩主として期待されましたが、なんと、藩主就任のわずか二十日後に弱冠(二十三才)で逝去されたのです。

※襲封…領地を受け継ぐこと。即ち藩主に就任すること

藩主に就任して十年後の弘化三(一八四六)年四月、突然、幕府から呼び出しがあります。

「毛利敬親が進める防長両国の藩治が良好である」との理由で褒賞され、その証として鯉魚に雲龍の高蒔絵を施した立派な「鞍と鐙」が下賜されました。幕府による大名の褒賞は、特に外様大名が受けた例は希有なことで、他の大名の範とされ、非常に榮誉なことでした。

この一事を見ても、公が並の大名ではなかつたことは明白ではないでしょうか。

### ○公が最初に取り組まれた施策は何ですか。

公の藩治の要諦は、藩財政の立て直しにありました。そこで、家臣に対しても質素儉約を旨とする僕政と、冗費を無くする流弊の改正をかかげ、財政改革の担当者には、長年江戸藩邸や国元の萩城で行政を担当した村田清風を用いました。

天保十(一八三九)年、先ず家臣に対して、経費節減を旨とする「節儉令」を公布して節儉に努めさせ、同十一(一八四〇)年には奥向諸役の冗費を節約して贅沢を戒め、質素節儉を令する「僕政令」、婦女子の服装に綿服着用を義務づけた「婦女綿布禁止令」、諸士の服装に綿服着用を義務づけた「諸士服装改定」など、節約に関する内容の布達を相次いで出したのです。

また、同十一(一八四〇)年には窮乏する藩財政の実状を明らかにし、老臣や重役に財政難の打開に関する意見を徴するなど、財政難解決に向けての取り組みを始めました。そして、同十三(一八四二)年の正月には、向こう五年間、引続いて僕政令の遵守を命じて経費の節減策を継続したのです。

従来、習慣的に行われていた流弊の改正では、天保十一(一八四〇)年、新任者が古参者に贈っていた挨拶料としての謝礼を、一切禁止すると定めた「土風矯正令」を布達し、また、同十三(一八四二)年には「淫祠解除令」を出して、元禄年間に調査した際の根帳(台帳)に、記載されていない仏堂九千六百余件、仏像一万二千五百余体を廃棄しました。

このように、先ず身近な所から質素儉約を進め、藩士の意識を高めて、財



幕府褒賞の証・鞍と鐙 (毛利博物館蔵)

### ○最も意を用いられた施策は何ですか。

文武の奨励です。長年平和が続き、家臣に尚武の精神が薄れた現状に危機感を抱かれ、また、学問の大切さを痛感されていたのではないでしょうか。

先ず、天保十一(一八四〇)年「文学興隆令」を令し、身分の上下に関わらず藩校で修学すべきものとして、文学の興隆を推し進められました。同十二(一八四一)年には、江戸桜田邸内に講堂および弓、剣、槍、馬場を備えた文武の修業場「有備館」を完成させ、江戸藩邸に在勤する家臣の習練場を建設しました。

次いで、同十四(一八四三)年、藩主の名前で文武の奨励を通達し、家臣の各層に責任者として稽古掛一人を任命し、文武に励んでいるかどうかを指導・監督されました。

一方、城下町の堀内には、享保四(一七一九)年に開校した明倫館が手狭となっていました。公は弘化三(一八四六)年、引退していた村田清風を学校御用掛に任命して、明倫館の充実・改築の基本方針を立案させ、重建を進めました。その結果、嘉永二(一八四九年)年、城下江向の地に新明倫館が拡充・移転して完成し、自ら出席して開校式を行ないました。

新明倫館の規模は、一万五千百八十坪の敷地に聖堂、講堂、書生寮、劍・槍・弓道場および馬場や水練場、世子の学習場など完備した総合学園で、規模は西日本随一と称されました。特に藩財政の厳しい中、この大事業を成し遂げた敬親公の英断は素晴らしい、この藩校から、幕末維新～明治期にかけて活躍する多くの人材が輩出したことは、公の先見の明と、人材育成に対する意気込みを見る思いです。

なかでも注目されることは、嘉永五(一八五二)年以来、文武を問わず、毎年五十名程度の家臣を、公費でもつて



明倫館模型 (山口県立博物館蔵)

政の再建に努められたのです。

藩外への武者修行を許したことです。その一人、中島治平は長崎に留学し、英蘭二ヶ国語および理化学、冶金術を学んで帰國し、西欧文明を広く紹介して萩藩の近代科学発展に貢献しました。

小野為八も長崎に留学して高島秋帆の門に入り、電気および写真術を修めて帰国しました。また、木戸孝允は私費でしたが、剣道修行のため江戸斎藤道場へ入門し、塾頭を務めたことから多くの知遇を得て、その後、全国的に活躍したように、幕末動乱期にその知識や経験、人脈が生かされたケースも少なくなかつたのです。

### ○民政の安定にはどのように氣を配られたのでしょうか。

公は襲封して間もない天保十一(一八四〇)年、米作に関わる農民の労苦を自ら体験することを思い立ち、萩城内に水田を開いて田植を行い、秋には自ら稻刈りを行つて米三斗七升の収穫を得られました。

弘化元(一八四四)年五月には、防長両国は大雨洪水に見舞われ、大凶作となりました。公は「窮民賑恤令」を布告して、独居老人、独り者、病人等のうちに生活困窮者を対象に、米一俵宛を支給して救済しました。これ以後も、社会的弱者に対し、常に配慮を怠りませんでした。

嘉永三(一八五〇)年七月には三女の萬世姫が誕生しましたが、この年の五月と

八月には大雨洪水が発生し、両国内に甚大な被害をもたらして農村の疲弊は甚だしいものがありました。そこで、我が子三女の誕生日を理由に、螺寡<sup>かんか</sup>・孤獨廢疾<sup>きゆうじゆ</sup>および身寄りのない無告者を対象に、「三女誕生の祝米銀」を配布して救恤策を講じています。

\* 螺寡<sup>かんか</sup>：ひとりもの  
廢疾<sup>きゆうじゆ</sup>：身体障害

このように、公は社会的な弱者にも、常に配慮を怠らない民政を行つていたので、農民や貧窮民からも尊敬と厚い信頼を得ていました。

### ○城下町萩の治水対策についての功績を聞きますが…。

天保七(一八三六)年の、いわゆる「申歳の大水」には、城下町萩の大半の家屋が水没して、多くの死者が出ました。公子であった後の敬親公は、河添の南園邸から瓦町の御客屋へ、命からがら避難したと伝えられています。

前述したように、嘉永三(一八五〇)年の大雨洪水は国内に甚大な被害をもたらし、米価も高騰し、多くの窮民が生じました。そこで、藩は馬関で非常救援用の米を大量に買入れて窮民に配布しました。公はこの大雨を大変心配され、

「予に何か悪い行いがあり、予の不徳のために天が罰しているのだろうか」と自ら反省・心配され、国中に、「何か国政に不都合があれば、忌憚なく言上せよ」と沙汰されたのです。

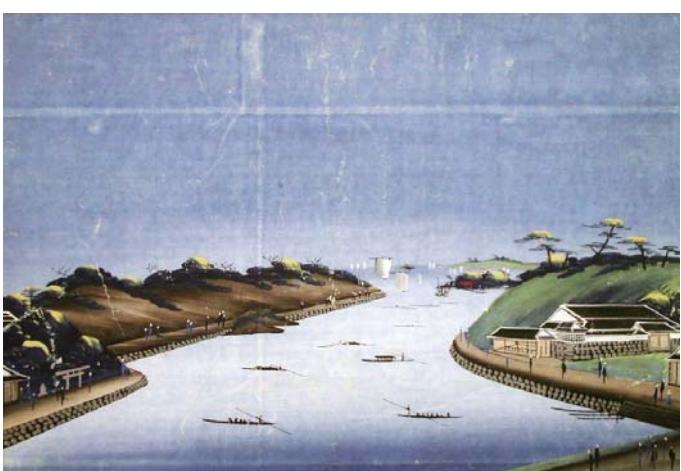
一方、城下町萩を流れる橋本・松本両川の治水の方策について、広く士民に意見を求め、家臣の布施氏が提案した姥倉に運河を開削する案を採択し、嘉永四(一八五二)年十一月、自ら実地に姥倉の地を視察して運河の開削を決定しました。嘉永六(一八五三)年二月、公の手元金二千両を工事基金として、待望久しい開削の起工式を行ない、二年半に及ぶ歳月をかけて安政二(一八五五)年、姥倉運河が完成しました。

この運河の開削は、公の民政最大の懸案事項であり、この運河の開削により、城下町萩は長く水害を免れることとなつたのです。

### ○軍備面の対応は如何だったのでしょうか。

出没する黒船に危機感を抱かれた公は、藩の軍事力の検討を村田清風に命じられました。村田は軍備の現状を検討して軍事演習の必要性を痛感し、天保十三(一八四二)年十一月、明春萩郊外の羽賀台<sup>はがだい</sup>で大閱兵を行うこととして「大閱兵準備令」を公布しました。参加者の主体は八組士(大組士)が中心で八部隊編成、藩士の服装は陣笠に陣羽織の出で立ちで、携行品は一日分の食料に水筒・蓑など。銃・砲は藩が貸与することとしました。

翌十四(一八四三)年四月朔日、陣羽織を着した藩主敬親臨席の元に、總軍勢一万三千九百六十三人、馬数五百三十四頭が羽賀台に集結し、指揮官の号令一



姥倉運河の図（萩博物館蔵）

下、一大軍事演習を展開しました。

この軍事演習は、萩藩にとつて実に二百年振りに行われた演習でしたが、この経験は、

これ以後、大森出兵や相州警備、あるいは幕長戦争、戊辰戦争など一連の紛争に大いに役立つことでしょう。

また、外敵に備えて、弘化

元(一八四四年)北浦沿岸の要衝



天保閥兵の地碑（萩博物館提供）

に砲台を築き、江戸麻布邸内の武器庫を自ら開いて武具兵器の収納状況を検閲しました。また、国元萩には当時西洋砲術の第一人者と称された、延岡藩士吉羽数馬を招いて指導を受け、羽賀台に於てその実技を見学しました。

嘉永三(一八五〇年)、藩は萩城および領内沿岸警備体制について、幕府へ報告書を提出しておりますが、その内訳は、兵数三万三千九百七十人、大砲五百五十八門、小銃一万千五百六十九丁などでした。

ついで、同五(一八五二年)には一月から三月にかけて、自ら嚴冬の北浦海岸に出向き、海岸の防備状況を具に巡察し、翌六(一八五三年)には、北浦海岸の海防部署を定めて、緊急事態に備えて家臣の配置体制を構築しました。

一方、萬一の戦火勃発に備えて、万延元(一八六〇年)には軍事演習場を城下西浜に設け、二町四方の地に砲台を築き、大砲数門および閱覧所、馬場、射場、剣槍場などを設けて軍事演習に努め、翌文久元(一八六二年)には城下菊ヶ浜にも教練場を設置して外敵対策に努めました。

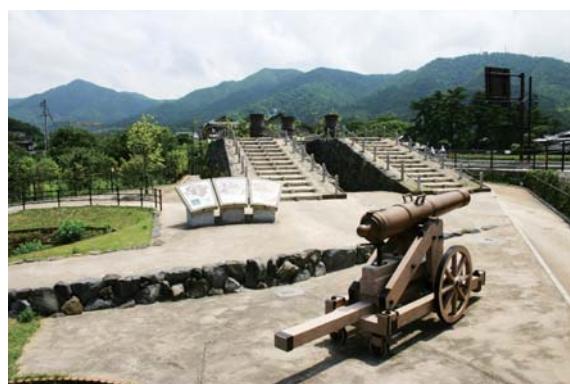
なお、海浜にある萩城が、黒船からの砲撃の可能性を考慮して、同三(一八六三年)「萩地は緩急の際、封内四方に号令の便を欠く」として、山口への移鎮を決めました。

## ○黒船来航後の軍備対策はどの様でしたか。

嘉永六(一八五三)年六月、米艦隊を率いるペリー提督が浦賀に入港しました。幕府により大森出動命令を受けた萩藩は、直ちに兵員五百人、大砲三門、小銃百丁余でもって出動し、外敵に備えました。この萩藩の迅速な対応には、

各藩とも大いに驚いたと言われています。この萩藩の対応と軍備の充実に注目した幕府は、ペリーの再来港に備えて、最重要地域である相模国西浦賀を含む三浦郡、鎌倉郡三十九ヶ村の警衛を萩藩に命じたのです。

当時、銃砲の不足を痛感していた萩藩では、銃砲製造を藩業としていた郡司武之助を製造主任と定め、城下松本村の郡司居宅を铸砲所として洋式大砲の製造を急がせました。また、江戸近郊では、嘉永七(一八五三年)には江戸砂村の葛飾邸内に銃砲铸造所を新設し、銃砲の铸造を始めました。さらに文久三(一八六三年)には、三田尻才判今宿村、小郡才判鑄銭司村、福田の三ヶ所に铸砲所を設け、郡司千左衛門に大砲の铸造を命じました。銃砲に必要な火薬等の製造も、安政五(一八五八年)萩中津江の茶屋原に、精鍊方役所、硝石煮立場、水車場などを建設しています。



郡司鑄造所跡（萩博物館提供）

ついで、万延二(一八六二年)には海軍局を設置して海軍元締とし、文久二(一八六三年)以降、英國商人より順次軍艦を購入し、明治元(一八六八年)には軍艦一〇隻余を保有して、海軍の充実を図ったのです。

(次号に続く)

〔あとがき〕 維新史回廊たよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。バックナンバーは、維新史回廊ホームページ(<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/ishin/index.html>)でご覧いただけます。次号発行は九月上旬予定です。皆さんのご意見、ご感想をお待ちしています。